

新しい「いのり」の領域を探して

高岡発「いのり」のスタイルへ

平成19年度より、新クラフト産業・デザイン育成事業の新しいプロジェクトがスタートした。

テーマは、「いのり」。高岡の伝統工芸産業界が培ってきた技術・技法を活かし、これまでの宗教用具にとらわれないう、新しい価値を持つ「いのり」に関する商品開発と産地プロデューサーの育成をめざす。

暗いニュースが続き、社会への不信や将来への不安が増加する毎日。また、受験や出産など、人生には祈らずにはいられない節目がある。「心」に関わることは、今最も大切なテーマといえる。

世の中にはすでに、従来にはなかった「いのり」のアイテムが出てきている。現代のリビングルームにふさわしい調度品、現代人の行動様式にあったラック、キーアイテムなど、多様化している。

高岡は、神仏具や梵鐘など心に関わるモノづくりの伝統がある。その高岡から、人々の「心」に安らぎをもたらす新しい価値を発信する。

「いのり」プロジェクトは、2年計画で、第1期である平成19年度は、マーケットやアイテムなどの研究に取り組み、平成20年度は、「いのり」ブランドの構築をめざす。

次のステージをめざす

ディレクターは、これまでも高岡の事業に関わっているプロダクトデザイナーの安次富隆さん。地元高岡のリーダーには、銅器メーカーの能作克治さん。そして、銅器、漆器のさまざまな業種から16社のメンバーが参加した。

第1回の研究会では、安次富さんからこれまで手がけた高岡を始めとする産地プロデューサーの事例が紹介され、「いのり」プロジェクトは、さらに次のステージをめざしたい」とのコメントがあった。

つまり、地域の自活力をつけるということである。他に頼ることなく、自らがプロデューサーとなり、自分たちの力で一から商品を生み出す。そのことにより初めて産地は活性化する。

メンバーは、まず「いのり」とは何だろうという問いかけから模索を始めた。グループに分かれ、ワークシヨップを実施。「いついのり?」「どこでのり?」「何をいのり?」「何を使っているの?」

という4つの項目について、それぞれ具体的な言葉を出していく。それを、各自紙に記入してひとつの「いのり」のテーマを選び、大判の紙にまとめていった。第4回研究会では、安次富さん出席のもと、その成果を発表。いのりのテ-

マは、「安心」「家族」「成功」「幸運」「回復」「無事」など、多岐にわたった。

安次富さんからは、「今回のアイデア出しは、いのりの概念を広げる感じでよかった」「家族の年間カレンダーや年表を作って、いのりのシーンを書き出してみたら」などのアドバイスがあり、次回への課題とした。

日本や世界の具体的ないのりのアイテムも参考資料に出され、いのりに関わるモノの幅広さ、奥深さに質問や感想が飛び交っていた。

21年東京での出展を目標に

今後は、テーマとアイテム案を決定し、製品化へ向けてのデザイン検討に入る。

「いのり」プロジェクトの成果である「いのりブランド」は、平成21年春、東京で開催される展示会に出展することを目標としている。

この研究会を通じてメンバーたちが気づきたいのりの多様化は、未来が見えない現代社会を反映しているのかもしれない。

高岡発の「いのり」が、人々の心に安心や幸福を生み出す日まで、自分たちの力で商品を作り出すための努力は続けられる。



ディレクターの安次富隆さん



ブレインストーミングを行い、出てきたものを貼っていく。



第1回研究会



リーダーの能作克治さん